



発行日：平成 25 年 10 月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第 14 回海部会WGを開催しました！

10月7日に第14回海部会WGを開催しました。矢作川河口干潟（矢作川 0.6k 付近左岸）にて、干潟生き物調査を行い、その後、調査結果について、ふりかえりを行いました。



日時：H25年10月7日(月) 11:25~13:00
活動場所：矢作川河口干潟（矢作川 0.6k 付近左岸）
参加者：14名（事務局含む）

◆主な活動・会議内容

1：矢作川左岸 0.6k 付近の河口干潟にて、生き物調査を行いました。



矢作川左岸 0.6k 付近の河口干潟にて生き物調査を行い、生物の生息状況を調査しました。



左岸 0.6k 付近河口干潟



0.4k と 0.7k で調査します



25×25cm の範囲を調べます



生物名と個数を調べます



見つかった生き物

※調査結果は裏面に記載しています。

2：その場でふりかえりを行いました



調査後、見つかった生物の種類や生息状況について、その場でふりかえりを行いました。また、東幡豆町天然干潟、西浦地区人工干潟での調査（第11回WG）との違いについての話し合いを行いました。

【主な内容】

- 砂を入れて干潟を造成した場所よりも、洲が川下に動いているように感じた。
- 海の干潟と川の干潟は違うので、一概に比較できないが、砂の状況はすごくよかった。
- 生き物はいるが、繁殖はしていない。ヨシ原があると、エサの供給が安定する。

※話し合い中のご意見は裏面に記載しています。



◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 西原、専門職 後藤

TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100

*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト (yahagigawa@iijnet.or.jp) までお送りください。



◆干潟生き物調査の結果

●東幡豆町天然干潟、西浦地区人工干潟 25×25cm 当たりの坪刈り（深さ 20cm）の調査結果は、河口 0.7k 地点（H22 年施工）で 7 種、河口 0.4k 地点（H24 年施工）で 7 種の生物が見つかった。また、個体数は、河口 0.7k 地点（H22 年施工）の方が多く存在した。

	写真	種類	NO.1	NO.2	NO.3	合計 (個/m ²)
河口 0.7k 地点 (H22 年 施工)		ソトオリガイ	5			80
		ウミニナ	1			16
		ユウシオガイ	3			48
		シジミ	1	5		16~80
		ゴカイ類	1	1	2	16~32
		チゴガニ	32	2	17	32~512
		不明		1		16
河口 0.4k 地点 (H24 年 施工)		アサリ	1			16
		シジミ	5	5		80
		ロロガイ	4			64
		ホトトギズガイ	4	2		32~64
		ウミニナ	2			32
		チゴガイ	1			16
		ハマグリ		1		16

◆話し合いでの主な意見

① よかったと思うこと

- 砂はすごくいい砂である。稚貝にいい砂だと思う。海にもっていきたくらい。（鈴木）



② 干潟生き物調査での気づき

- 干潟の造成には、もともと洲の砂を使用しているが、当初砂を入れたところよりも川下にずれている。
- ヨシ原があるとエサの供給が安定する。生物が育つためには必要である。
- 生物の数はそこそこいるが、種類が少なかった。もっとゴカイがいるかと思ったが、少なかった。
- 鳥も昔に比べるとずいぶん減った。シロチドリ、ソリハシシンがチゴガニを捕りに来ていた。
- 1960 年代までは、ここでハマグリが何百トンと捕れた。今はパラパラみられるが、繁殖はしていないようだ。



③ よくなかったと思うこと

- 干潟は、でこぼこで水たまりができないと生物の生息環境が確保されない。



④ 東幡豆トンボロ干潟、西浦人工干潟との違いは？

- 海の干潟と川の干潟は、根本的に違う。海の干潟はすべて泥であるが、川の干潟は表面は泥で、下は砂である。
- トンボロ干潟が 1 番よかったが、ここも雰囲気は似ている。

今後のスケジュール（予定）



次回 海部会第 15 回 WG を 11 月 27 日（水）に開催します

矢作ダムまで出かけ、矢作川上流の流入土砂の状況、処理の状況、土砂受入地の状況を皆で見学します。

